

同志社ギャラリー企画展

「学徒出陣 75 年・私学と兵役 同志社の学徒出陣」

望田幸男（同志社大学名誉教授）

日中戦争から、さらに太平洋戦争への拡大にともない、兵力不足がいちじるしくなり、大学・高等専門学校に認められていた兵役猶予が、1943年、勅令により停止・廃止され、在学のまま徴集され、戦地に派遣されることになった。いわゆる「学徒出陣」の悲劇の開始である。そして同志社においても75年前に学徒出陣壮行式が挙行された体験をしたのである。

このほど同志社社史資料センター主催で、この75年前の悲劇を想起しつつ、「私学と兵役」という歴史的視点から、ここにいたる軌跡が、所蔵資料にもとづいて、「ギャラリー企画展」（11月1日～12月22日）として展示されることになった。

そもそも戦前においては、私学は国家行政との関係では宿命的ともいえるべき二重の苦闘を運命づけられていた。すなわち私学が教育機関として国公立と同等に扱われるための一般的な対応に加えて、同志社の場合のようにキリスト教主義を標榜する教学機関が、とりわけ兵役猶予を認められるかどうかという問題に直面したのである。そこには兵役猶予を認められない場合、私学は学生徴募の道を極度に狭められ、存立できなくなるという深刻な問題があった。

1890年（明治23年）に「教育勅語」が發布されると、同志社が徴兵猶予の適応をうけるためには、主義・主張が教育勅語に反しないようにしなければならなかった。さらにアメリカのキリスト教団体からの財政支援も問題視された。当時の同志社教学責任者たちは一方では、国に譲歩することで徴兵猶予の適応を受けつつ、他方では卒業生や教職員の強い批判にさらされたのであった。こうした事態の推移は、展示の第二章「名を捨て、実を取る」に見ることができる。

次いで第三章「文部行政下に組み込まれる同志社」では、20世紀に入ると、同志社に徴兵猶予が適用される一方で、文部行政下に組み入れられていく過程が語られていく。加えて1925年（大正14）に勅令「陸軍現役将校配属令」が發布され、同志社内のすべての学校で現役配属将校を受け入れていった。

最後の第四章（勅令「在学徴集延期臨時特例」發布）では、同志社の学徒出陣への道程が展示されていく。満州事変（1931年）を起点にして、日中戦争の勃発（1937年）などを受けて、政府は兵力不足に対応すべく、徴兵猶予の年齢の引き下げ、在学期間の短縮を進め、太平洋戦争の勃発後には、戦局の悪化のなか、ついに1943年にすべての学校の徴兵猶予の特典を撤廃した。同年11月

15日、これを受けて同志社でも学徒出陣壮行会が今出川キャンパスで挙行された。第4章で関連する勅語類、寄せ書き、出陣式の関連文書などが展示されている。

以上、「ギャラリー企画展」の大筋を紹介してきた。総じて「私学と兵役」「学徒出陣」に関する同志社をめぐる歴史的軌跡を、資料にもとづいて跡づけられ、エピソードでは、学内資料で369名の戦没者名簿が確認されていることが報じられている。

総じて「学徒出陣75年」と銘打った展示から、「わだつみの声」の同志社版のようなものを想定すると、期待ははずれる。むしろ展示は「私学と兵役」というテーマに沿った客観的な年次記録という基礎作業を意図したものと見なすべきであろう。

それにしても企画展を通じて、「学徒出陣」を必然化させた旋回点は、学徒出陣より12年前の満州事変の勃発に見てとることができよう。この意味で、「学徒出陣」という悲劇をくりかえさない道は、他国との軍事的衝突や侵略戦争に突入するまえに、それを阻止し、平和のうちに共存するという国家的進路を確保することであろう。「学徒出陣75年」のいま、あらためてこの一点こそ銘記すべきであろう。